

## 環境的回心の4 つの次元

by Sr. Mary Ann Casanova, Sisters of St Joseph of the Sacred Heart

### 初めに

地球が現代の人々の生活の廃棄物でどんどん覆われていくことを想像するのはあまり難しいことではありません。教皇フランシスコの2015年の回勅、ラウダート・シは地球がゴミの山に耐えているという話から始まります。人間が地球を取り戻し、再建し始めるにはかなりのリイマジン(再考)が必要になってきます。

そのようなリイマジン(再考)を果たすには環境的な回心が必要になってくると思います。環境的意識の強い人々と団結し、力を合わせて努力をすれば、人類は神の創造物と正しい関係を取り戻すことができます。私達ホモサピエンス(人類)は周りの被造物全てを大切にできる能力を備えています。教皇フランシスコが仰る「誤り導かれた妨げや偽造の付着物」は、人々を誤った方向・生き方に誘導しようとしています。私達にはそれを払い除ける能力があるのです。

相利共生の関係というのは、人の環境に対する意識の形成と、環境に対する理解の深さの間に存在します。環境に対する理解と親密度が深ければ深いほど、それだけ環境に対する意識が大きな役割を果たすこととなります。環境に対する意識は相関性への認識を高めるため、人のいたく一つ一つの思いや気持ちが大きく関わってきます。究極的にはこの環境に対する意識が今後のアクション(行動)への主要なガイドとなっていきます。

環境に対する意識というものは、何でもそうであるように、常に動いており常に変化してっていきます。回心・転換(コンバージョン)というのは「根本的方向性や展望の劇的な方向転換であり、常に自己超越を図り、信頼性を高める方向への進行中のプロセス」(Ormerod and Vanin 2016, 330)ではありますが、「環境的回心」というのはそれに加え、地球のコミュニティーに対する人類の立場と役割というものの概念そのものを作り変えすものなのです。

著しい変化、或いは回心の次元は Lonergan 氏と Doran 氏によって研究されてきました。まず Bernard Lonergan 氏は宗教的、倫理的と知性的の三つの回心の次元があると見なしました。更に Robert Doran 氏は、心因的という四つ目の回心の次元として加えました。

### 宗教的・霊的回心

Lonergan 氏の理論では宗教的回心を出発点としています。これまでの観念を放棄することが宗教的回心の中心になります。どのような宗教的同盟に所属していようが、回心というのは自己を超え、超越的な現実を認識し、そしてその超越的現実を愛することです。

Abrahamic faith(アブラハムの宗教—キリスト教、イスラム教、ユダヤ教とバハイ教)は、慈愛深い神を愛するという事は、神を愛し、神が愛するもの全てを愛し、神が愛するように愛する、というように説明しています(Ormerod and Vanin 2016, 334)。自己陶酔的、自己中心的な考え方を超えることができれば、被造物に対する喜びや夢を味わうことができるということです。環境的意識というのは、個人や集団の態度や行動を変えることを促す効果があるのです。自発的に簡素な生活をするなど、自己抑制や何らかの自己犠牲をする習慣を取り入れるということは、世の中の苦しみ、罪、悪事などに対する意識が高まりつつあるからなのです。

### 倫理的回心

二つ目の次元である倫理的回心には、人間の判断や行動を左右する基準である、選択、価値そのものが変わるということをも含みます。フランシスコ教皇は倫理的・霊的回心というのは地球に住む全ての人々が現在の地球の危機に取り組むための「促進剤」のようなものだと言いました(Deane-Drummond 2017)。真正の倫理性、いわばカトリックの社会教育の原則に従った倫理性ですが、それに向かつての成長・発展については、Lonergan 氏と Doran 氏の理論の中で要約されています。

Lonergan 氏と Doran 氏は「無学と故意的な悪質行為」と「環境に対する意識とそれに伴う行動の連続体」は真反対の行為だと指摘しています。詩人 Drew Dillinger の曾ひ孫が夢の中で彼に尋ねました。「その事実を知った時、おじいちゃんは何をしましたか？」(Dellinger 2017 年)。地球を取り囲む環境的危機は、人間の判断や行動が基にあるということはわかっています。人類はこれ以上、「知らなかった」と言い訳をし続けることはできません。倫理的回心をする事により、私たちは地球コミュニティーの声を聴き、愛情深い目で見える能力を高めることができます。

環境的意識を持つと、これまで人類が行ってきた意図的ではなかった因果関係も見えてくるようになります。人間の考え方や倫理的・政治的な行動が、習慣的・常習的になってゆくことなど、あらゆる面に対する自覚や意識が高まります(Morton 2018 年、loc 669 と 841)。従って人間の思

い、心、日常生活などにおける癖というものは頻繁に見直す必要があります。カトリック信者にとっては、常に良心を確認する訓練の題材でもある。

### 知性的回心

Lonegran 氏は、環境的回心の三つ目の次元を「知性的回心」と呼び、この回心を達成することは実に稀なことだと言っている。知性的回心というのは、生涯にかけてのプロセスであり、大転換を超越した人間の宇宙論(Ormerod and Vanin 2016, 331)の革命的な解明を要する。ゆがんだ現実性、客観性、人間の知識と客観性を征服し、真正のもののみが残り発展していくというレベルである。

環境的意識は人間の理解力を促進し、さまざまな物事の相互関係に対する識別された理解は、高次元の知識の表明でもある。最初の例えでは、環境に対する知識は記述的な知識として説明されている。記述的な知識の一般的なツールには、事実、図形・図表、データや実証分析などが用いられる。解釈上の知識は、因果関係の説明を提供することにより記述的説明の方法を超えた意識レベルを高めることができる。

### 心因的回心

Doran 氏の理論である「心因的回心」という次元は、環境的回心、環境的意識を考慮するにおいて特に関連性がある。この回心の次元は、人間の自己超越を通して、人の「再配向」がなされるということなのです。心因的回心は、美、善、愛、真実の高度な受け止め方ができるようになるなど、人間の価値観や感受性を高めることに繋がります(Ormerod and Vanin 2016, 332)。キリスト教信者はこの心因的回心の特徴の多くを神様からお恵みやメッセージをいただいた瞬間というように表現します:ケルト族が俗に言う「thin place(あの世とこの世の狭間)」にたどり着いたことを自覚した瞬間、或いは「セオスフィア(神の領域)」と「バイオスフィア(生物圏)」がふと触れた瞬間など。

## この理論をカロンデレット・ストーリーと繋げる

私の21世紀の観点から、これまで紹介しましたコンセプトをカロンデレット・ストーリーの一つと繋げてみたいと思います。私は2013年にアリゾナ州のツーソンでサバティカル(研究休暇)を取っている時に初めてこのストーリーと出会いました。シスター・モニカ・コリガン、CSJ が150年前に他に6名のシスターと共に36日間をかけてセントルイスからツーソンへと旅をした経験が彼女の日記に記されていますが、その内容(私の改版バージョン)を下記に紹介いたします。

### 七人のシスターの旅

私たちはよく乗り慣れたセントルイスの鉄道にを走り始めました。

最初は清潔で新しい車両は、たちまち人で一杯になりました。  
移住者らしき、雑多な人の寄り集まりでした。  
子供たちは泣き叫んでいました。  
全体的に不快な臭いがしましたー鶏と卵とシガールの何とも言えない組み合わせ。

軌間のゲージが狭くなっていきます。  
七人のシスターとオマハとの間の距離が遠くなっていく。  
シスター達は一緒に旅する人々と交流を始める。  
それぞれの信仰や意見は快く横に置く。  
シンプルな会話や身振り手振りで他人だった人々と親しくなる。  
しかし、インディアンの人たちは交わらない。  
彼らはただバックグラウンドで音楽を演奏する。  
彼らは「かわいそうな生き物」で、汚れた地面にキャンディーを投げてやると、それを拾って食べる。  
老女たちは肌を露わにした服装をまとい、髪は泥と水の混ぜ合わさったようなもので飾っている。

ロッキー山脈の山並みが見え隠れしている。  
恐ろしく、荒れ果てて見える。  
山肌の割れ目は深く、危険を感じさせる。  
「デビルズ・ゲート(悪魔の門)」を通り抜け、くねくね曲がり、激しく流れるウエバー川に沿って走る。  
かと思うと、ふと平和な景色に変わる。  
味気ない山並みと寒々しい岩石の景色が一変し、花園、日蔭、そして果実のなる木が見えてきた。  
懐かしく美しい景色である。  
でもそれをもたちまち後にする。

旅を始めて一週間がたち、気候が変わった。  
日中の気温は重苦しく暑い。  
朝は骨身に染みる寒さである。  
殺風景なわびしい風景が、だんだんと荘厳な美しさに変わっていく。

サンフランシスコでの一時停車で足を地につけることができる。  
だが、すぐさま船乗りの足にならなければならない。  
そして、いろいろな面で居心地の悪いこと。

小さいワゴンに乗り長い、危険な旅が始まる。  
日中は照りつく酷暑の太陽の陽に当たり、砂漠の夜は凍てつくように寒い。  
夜は星を見上げつつ、ワゴンの下で眠る。  
狼の存在や皆殺しのストーリー、サボテンのとげや淋しいカウボーイとの遭遇におびえながら。

テーブルやベッドの代わりに石や岩を使う。  
見慣れた花の代わりに、見慣れない土着の花がある。  
砂利道は礼拝堂の側廊となり、  
自然の大聖堂の中で私たちは賛歌を歌い、祈り、行進する。

疲れたシスター達は小山の多いアメリカの砂漠を横断する。  
地質は果てしなく荒廃された嫌悪すべき状態である。  
火山岩と赤い砂の醜い山並みは死の落とし穴のようだ。  
シスター達、移民者たち、そして家畜はみな喉の渇きに耐える。  
険しい山道と上下の激しい気温をだれも避けることはできない。  
高度の激しい上下差に影響されない者はいない。  
シスター達は聖書に記されている40マイルという距離を歩いている。  
いつぞやは古代の海であったという土地を通り抜けながら。  
この土地にはこの土地なりの歴史がある。

石畳は砂床へと地形が変わった行き、砂には砂なりの独特のリスクはある。  
月明りの照る涼しい夜に旅をするのはある意味心地よい。  
互いに守護聖人であるヨセフの話を思い出し語り合う。

馬小屋は皆の共同の寮となり、  
互いを思いやる親切さとお互いを尊重する気持ちが文化的なギャップを狭める  
卵が旅人たちを養う贈り物となる。

幅400ヤードもあるコロラド川がアリゾナへの入り口である。  
入り口の両側には巨大な花崗岩が立っている。  
小さいいかだ船のような引き船はあまりにも不安定である。  
シスター達や馬、ワゴンはみな生と死の間をさまよう。

馬が一頭落ちる、  
サンディエゴから旅を共にしてきた友も一人息絶える

ワゴンとその乗客は共々危うく川に転がり落ちそうになるが助かる。  
人間以外の生き物、動物(馬)たちに救われる。

旅の途中一休みをしていると状況が一変した。  
武装した軍人のエスコートが到着する  
司祭やコックの姿に心が豊かになり励まされる  
互いに歓迎し合う  
そして、朝に夕に旅は続く  
道端の墓場を見ると、自分達も同じように皆殺しになるという思いが頭をよぎる。  
だか、そこで高潔なピマ族の戦士が現れ、私たちの守護天使になる。

残り75マイル。  
しかし、まずは狭い Picacho Pass (ピカチヨ道) を通らねばならない。  
「男たちは絶えず大声で叫びながら  
鞭や拍車で馬を促す。  
すると稲妻のように馬は走りだす。」  
騒々しいキャラバンの音は早朝の恐怖をかき消してくれる。  
そして私たちは数時間後に出会う賑やかなツーソンの歓迎のための挨拶の準備をする。

### この物語をリイマジン(再考)する

このシスター・モニカのストーリーを紐解きながら再考し、自分自身の環境的回心からの観点に当てはめてみたいと思います。

環境的な観点から内容を読んでみると、いかにしてその人のいる場所や環境によって、ものの見方、受け止め方や世界観が変わってくるかということがよくわかります。当然、七人のシスター達はこの並大抵ではない旅を続けている内に絆を深めていきます。雑多な人や動物の寄り集まりの話がストーリーの中に編み込まれ、旅が進むにつれて、次第に互を隔てていた垣根は取り壊されていきます。カトリック教徒でない人たちとの交流、文化やしきたりが全く違う人たちとの交流について、そして馬が1-2頭極めて重要な役目を果たしたことも書いてありました。色々な形でお互いに親切にもてなし始めました。居心地良く、慣れ親しんだ光景やあり方を超越した美しい光景や触れ合いについても触れていました。このように広く、深く物事の味方を変えるには時間を要します。

シスター達が汽車の窓から山沿いの風景を見下ろした時の印象と、汽車を降りて、自分達の足で歩いて旅をしながら見た景色の印象が対照的だったと思います。汽車から見下す景色は、恐ろし



く、荒れ果てていて、ぞっとするような、そして怒っているように見える景色だったようです。それと比べると、シスター達の徒歩の旅では、日記によると彼女たちはよく一緒に歌を歌い、一緒に祈り、まるで自分達が聖ヨセフと共にエジプトの砂漠を旅をしていることを想像していたかのようです。このように、私たちは上から自然界を見下すだけではなく、実際に自然の中に入り込み、自然という大聖堂に自分の身を置き、味わい、たたえることはとても大切なことだと言えると思います。

家具や、その他の人間の作った便利なものはなく、シスター達はその辺にあるもので間に合わせ、石や岩を使ってそれらをテーブル、椅子やベッドにしたようです。イエス様のように、シスター達は地面に腰かけて(Matthew 5:1, 13:1, 15:29)、地球と密着した日々を送った様子がかがえまします。環境的回心は、私達にも肉体的・物理的に自然と触れ合うことを促します。私たちの持つ感覚・勘というのは、驚くほど、そしてそれぞれ独自の方法で自然と触れ合うことを可能にするのです。時には、サボテンのとげが刺さったり、足にマメができたとしても、存分に自然を味わう価値は多いにあると思います。

シスター・モニカは星や月や土着の植物についても書いています。慈愛深い神を愛するということは、神が愛するもの全てを愛し、神が愛するように愛すること(Ormerod and Vanin 2016, 334)が必要であることを再確認させられます。実は、このことが環境的回心への私たちの使命の中核なのです。

シスター・モニカはアメリカの砂漠の一部についても簡単な描写・記述をしています。その昔はかつては海であったであろうという場所について書いています。囲む山々が全ての水が流出されることを防ぎ、それが彼女たちが見渡す Great Salt Lake を形成したようです。このストーリーの内容からも、環境的变化がかがえまします。時間と共に地質上の変化がどんどん起こっていくことを物語る地球の歴史について、シスター達は十分に認識し理解していたようです。地球の歴史の熟読について学ぶ地質学者のように、私達も「科学的な知識を深め、地球の変動のプロセスをもっと大局的な視点から見る」(Kim and Koster 2017, loc 721)必要があります。科学と大局的な地球の変動プロセスを信じ、私達も進展しつつある地球の歴史をより理解できるようになります。

シスター達は自分達のもつ恐怖とも向き合いました。彼女たちにとってはツーソンにたどり着く前に死ぬのではないかと恐怖はあまりにも現実的なものでした。喉の渇きに耐え、地面や道端に散らばる死体や骨を目の当たりにするたびに、命のはかなさを思い知らされました。このプレゼンテーションの初めに、地球が私たちの現代の生活の廃棄物に覆われているイメージを想像してもらいました。私たち、ホモサピエンス、すなわち人類が実は環境の変動を大きく影響していると

いう現実には直面しています。私たちが地球全体に生息する生物を危険にさらしているのです。どのようにすれば地球のためにより賢明に生きることができますでしょうか？

7人のシスター達の旅のストーリーの内容から得た、個人的な環境的回心に向けての主な特性を下記の7つのポイントに要約します。皆様も是非ともこの7人のシスターの旅のストーリーを更に分析し、ご自分の環境的回心に向けてのポイントやヒントを発見してください。

- 環境的回心を成して遂げるには周りとは協力しながら、不断の努力が必要です。
- 環境的回心を成し遂げるには、積極的に方向転換をし自然と共に歩む努力をする必要があります。
- 環境的回心というのは、自己陶酔的、自己中心的な考え方から抜け出し、自然を喜び自然に思いをはせる方向へのムーブメントです。
- 自然との物理的・肉体的な触れ合いが環境的回心を促します。
- 全ての生き物や被造物の威厳と本来備わっている価値を認識することが、全てのものを大切にしようとする人間の包容力(キャパシティー)に反映されます。
- 信頼性のある科学的事実に基づいた地球全般の歴史を感じ取る能力(と知識)を発達させる。
- ホモサピエンス(人類)が全ての地球の生き物を危険にさらしていることを認識すること。

## REFERENCES(参考資料)

Deane-Drummond, Celia. 2017. *A Primer in Ecotheology Theology for a Fragile Earth*.

Dellinger, Drew. 2017. "Hieroglyphic Stairway." In *Love Letter to the Milky Way*.  
<http://lovelettertothemilkyway.com/>.

Edwards, Denis. 2006. *Ecology at the Heart of Faith*. Kindle. Maryknoll, N.Y: Orbis Books.

Kim, Grace Ji-Sun, and Hilda P. Koster, eds. 2017. *Planetary Solidarity: Global Women's Voices on Christian Doctrine and Climate Justice*. Minneapolis: Fortress Press.

Merchant, Carolyn. 2013. *Reinventing Eden: The Fate of Nature in Western Culture*. 2nd ed. New York: Routledge/Taylor & Francis Group.

Morton, Timothy. 2018. *Being Ecology*. Kindle Edition. Cambridge: MIT Press.



Ormerod, Neil, and Cristina Vanin. 2016. "Ecological Conversion: What Does It Mean?"  
*Theological Studies* 77 (2): 328–52. <https://doi.org/10.1177/0040563916640694>.

Pope Francis. 2015. *On Care for Our Common Home: Laudato Si'*. Kindle Edition. Boston:  
Pauline Books and Media.